

# 体育科教育における思想性とその動向

広島大学 松岡重信

## はじめに

本企画の趣旨にそうためには、思想もしくは思想性ということが明確にされる必要がある。しかも、それは体育科教育の展開とのかかわりで論じなければならないという課題も付与されている。今日の教科教育の研究がとかく技術論に追われがちという編集部の指摘もあるが、現実問題として例えば授業研究といった問題領域の中でも多様な立場があるが、分析の概念枠、評価論にかかわってはたえず議論される場所である。<sup>1)2)3)</sup>さらに詳しくいえば、ある具体的な教授—学習を問題にする際、「何故そのように分析するのか」「何故そのような根拠が認められるのか」「何故……」「何故……」という問が5つも重なれば、研究者も実践者も、思想というには大げさかもしれないが、その授業観、教材観といった価値観にかかわる本質的な部分にふれざるを得なくなる。論争になれば、まさしくその傾向を顕著にする。<sup>4)</sup>この時の価値観などにかかわる本質的部分と思想性とはどうかかわるのか。素朴な疑問が残る。

丸山は、広義の思想を次の4つの成層として把握している。

- 1) 最も高度に抽象された体系的な理論・学説・教義（哲学）
- 2) 世界についてのイメージである世界観・あるいは人生観
- 3) より具体的な問題に対する具体的対応としての意見・態度
- 4) 理性的反省以前の生活感情・生活ムード・実感である。<sup>5)</sup>

しかし、これには対応させても余り意味のあることとは思えない。われわれは、時の場合によっては、世界観・人生観を変質せしめるし、異ったニュアンスで、これを語る。むしろ、ここで思想という時、諸科学の成果、諸事象に対する観察・経験の中で、素材に対して自己を豊かに鍛えていく点に「哲学」とは異った積極性を認める。確たる理論体系をなして公認性をもっていなくとも、リアルに体育教育の現実を認識し、それを検討の対象とし異論とつきあわせる中で、体系性を追求しつつあるものをより重点的にみていくこととする。

## 1. 体育と身体・健康・運動・技術・体力・人間形成の諸相

わが国における体育という概念自体、明治期の輸入ものである。それでいて日本の社会構造の歴史の変遷の中に、みごとに根をはり政治的要求にこたえ、国民的要求にもこたえようとした経過を経て、やがて死語になりうる可能性ももった概念である。

体育の概念は、宇土によればその変化は次のように要約される。<sup>6)</sup>

- (1) からだの教育：からだの健康維持，体力向上，からだの発育・発達の促進
- (2) 運動による教育：身体的・知的・社会的発達的手段としての運動
- (3) 運動の教育：生涯スポーツ，みんなのスポーツをめざす。運動は「目的～内容」を示す。

つまり歴史的にみると単純ではないが(1)→(2)→(3)の経過をたどりつつあるというのである。確かに指導要領の体育で強調されてきたところは上述の図式で一応間に合う。

しかし、たえずむしかえして議論されるところの、すなわち体育科教育の研究と実践にかかわって問題とされるところの、身体・健康・運動（文化）、技術等の諸概念は、背景をなす社会構造（政治的経済的文化的科学的諸関係）の特異的性質を反映して多様に議論された経過がある。従って単純に(1)→(2)→(3)の経過をたどっているとみるだけでは、歴史性も思想性も浮上してこない。まさに、この議論そのものが、体育科教育の展開をめぐる、多様な価値傾向（思想性）を主張しているのであり、時にはするどく対立し、また融合したかにみえて、実はくすぶり続ける。この過程にこそ焦点づけられねばならないと考える。

それは体力づくり（からだづくり）を要求する立場と、必ずしもそうではないとする立場に分極化出来る程、議論は単純な方向性をもっていないが、身体、健康、体力等表題にかかげた諸概念を網羅し、かつ一定の体系をなそうとしてきたものとして、「運動文化論」と「身体形成論」を素描する。

これらは、戦前の体育（国家奉仕の体育）から新体育への移行期の課題——民主主義的体育理念の確立——に最も深くかかわった歴史をもっている。当時表面的には、身体活動を通しての人間形成という理念と、体操中心からスポーツ中心の体育へという脈絡をもっていると考えられるが、その集大成としての昭和28年の小学校指導要領が、両者の論争の火種となっていることも一つの事実である。教材の遊戯化、スポーツ化、方法的には児童中心、班別学習の重視、特に日常生活を豊かにするためにレクリエーションの重視や運動の生活化の理念がもりこまれ、理論的には民主体育を大胆に前進させたものであるが、国民の生活現実とは合致するものでなかった。両者は、その戦後民主体育の批判とその問題克服という形で、体育科体育の本質を問題にしようとしたのである。そして今日も問題にしつづけているのであり、だからこそ、今日も多くの体育教師が、体育で何を教えるか、何を育てるのかと模索する姿の典型とみなせるのである。

## 2. 運動文化論と身体形成論

運動文化論という時、これは学校体育研究同志会（以下同志会と略す）、身体形成論という時、教育科学研究会（以下教科研と略す）という組織的基盤がある。というより、特に運動文化論の場合、その文化論の深化とともに組織的基盤が形成されたというべきである。

戦後の民主体育に対する批判は、生活体育・グループ学習批判という形と系統学習という立場からなされたことは、他の教科にも共通した性格をもっている。

教科研の立場から正木は、戦後の体育界はいくつかの目標をあげている中で『からだづくり』を

正當に位置づけていないと指摘し、「国民教育の中で他の教科で果し得ない『からだづくり』をになっているのは体育科である」<sup>9)</sup>とした。さらに身体形成要求は、資本の側からは労働者を①技術者②技術労働者③単純労働者に区分し分解していくことが要求されるが、勤労大衆の側からは、多面的な職業につきうる多面的に発達したからだが要求される。従って、「体育教育は、将来の生産労働と生活向上のために体育文化の教授・学習により、多面的に発達した身体を形成し、重要な運動能力を発達させ、かつ身体と体育文化とについての権利意識と連帯感を育てるものである」<sup>10)</sup>と展開する。

一方、丹下は、『運動を通しての人間形成』という指導要領はじめ、大かたにおいて公認的であったともいえるこの考え方を問題にした。民主的人間形成は、他の教科でも目ざしている。従って『運動を通しての……』は、教育一般の目標や要求の下請けが体育である。この下請け体育は、請け負わせる方の要求に応じなければならないので、体育独自の本質は見失われる。そこで、「運動そのものを自己目的とする教育、あるいは運動文化の追求を目的とする教育が体育であるという考え方をする。」<sup>11)</sup>そして、からだづくり(体力)については、「身体的な能力や体格は、単に体育科だけでは解消し得ない問題であるし、学校教育の中だけで解消できる問題ではない」と前提し「現時点では、運動文化の獲得・創造の過程として、身体づくりを考えていくのが妥当と考えるし、社会生活に必要な体力、健康を保持増進する体力は当然この中で養成できると考える。」<sup>12)</sup>そしてこの間、既に水泳をはじめとする文化財の技術指導にかかわる問題点の総点検に着手している。<sup>13)</sup>つまり、具体的な教授・学習の展開にむけて仕事を着々とすすめたのである。

しかし議論はさらに進んで、身体形成論は何故『身体の階級性』、それはとりもなおさず資本主義の矛盾のどんな小さなゆがみでも反映する身体の矛盾に対する運動文化論の楽観性への批判を展開する。大脳活動を伴った身体づくりは、労働者階級の基本的要求として、体育に課しているものと論を展開する。<sup>14)</sup>

1960年代前半における身体づくり(体力づくり)は、労働準備(生活準備)が、今日の技術革新を先どりした上でも、器用性、敏捷性、巧微性、持久性、機動性といった概念で強調されていた。<sup>15)</sup>そして、さして豊かでない子ども達の生活(労働者の生活)をみすえているが故にガンコでもある。それでいて「授業だけではどうにもならない体力」<sup>16)</sup>という実感、これは、どうにもならないと悲観している文章ではない。むしろ脱脂ミルクの栄養を改善したいという要求をこめて全面発達の体力を強調している。そこにおいてすら、「体格はむろんであるから、あらゆる運動に関係してきて、体育の授業だけではどうにもならないものがある。」<sup>17)</sup>と指摘している。体育文化の学習という一方で身体形成に対する具体的な展開を明示することに必ずしも成功しているとはいえない身体形成論の一つの側面をいいあてているかもしれない。

この1960年代前半の論争は、80年代に入って本質的な性格をかえないまま、ひきつがれている。田田と中村の“授業のイメージ”にかかわる論争<sup>18)19)</sup>も、「動作の調合」→「運動処方」<sup>20)</sup>では、よりイメージが散漫である。そして、ゆきつくところは、「よく体育の目標は、体力づくりにあるのか、

運動技術の習得にあるのか、それとも人間形成にあるのかという設問に出くわす。…(中略)…これらは相互に重層的な構造を形成している」<sup>21)</sup>におちついてしまうのか。そうではなく、この議論は、体育科教育における学力論につながっているとみなすべきである。これについては後に少しふれる。

しかし、運動文化論も身体形成論も、現実的な体育の歴史の中で、体育の本質を問う作業から出発しているにもかかわらず、人間と運動と教育と文化と社会・歴史という相対的に限定された問題領域の中で論理を構成している。そこに一つの限界があるようにも思えるが、これまでの論争に即していえば「運動文化の獲得・創造」と「身体形成」の問題が荒木のいうように同一路線上で語り得るかどうかの問題として浮上してくるようと思われる。

### 3. 人間の本質像にたちかえて、体育・スポーツをみる。

体育とスポーツは異なる……と伝統的に意識的に・で結んできた経過がある。体育は教育であり、スポーツは遊び娯楽といってしまうえばそれまでであるが、格の違いのようなものがあつたのではない。しかし、スポーツが余暇時間の拡大、国民的な健康に対する危機意識の昂揚、そして何よりも自由に楽しくという発想の中で、国民生活に根をおろしつつある。東西ドイツにおけるスポーツ科への名称変更、高橋は西ドイツの体育科→スポーツ科について「すでに『古風』とみなされる身体教育、身体による教育のイメージを払拭し『身体』や『教育』という抽象概念によって区分するのではなく、すでに広く一般に受け入れられている『スポーツ』の用語を導入することによって、それらの同質性、関連性を強調しようとするものである」<sup>22)</sup>と説明する。体育とスポーツを対置させる時、わが国においても既にスポーツの方がより一般的といえる状況にあるといえる。「アマチュアリズムの終焉」<sup>23)</sup>といおうが、「商業主義のスポーツ“侵略”」<sup>24)</sup>といおうが、“みる”と“やる”の分極化が指摘されようが、スポーツは国民生活に根をはり若芽をのばしつつある。1960年代後半から70年代前半にかけての急激な社会変化と、人々の運動需要の拡大、および欧米にみる体育思想(スポーツ教育、プレイ教育・運動教育)とその運動(生涯スポーツ、みんなのためのスポーツ)が共鳴したと大かたは分析する。<sup>25)26)</sup>そして、体育は、「教科体育に限定できるほどに、その伝説的概念は変わってしまった」<sup>27)</sup>という。それはそれでよい。著者の検討範囲においては、「保健」も「特別活動」についてもふれようとしていないのであるから。人間の本質像にたちかえて…という発想は、体育科教育の学力論が問題になり、目的論がより鮮明化され思想的に強化がはかられねばならないのは、まさに今だからこそ考えるからである。

「教育」や「身体」がイデオロギーを背景に抽象的とするなら、今実在する人間が、お前はそもそもなんだと問うことは、より抽象論になる可能性がある。しかし、運動文化論と身体形成論、ともに意識的にか、さけたとさえ思える本質的考察である。

『人間とは何か』この科学上のそして哲学上の基本命題は、人間観にかかわって遠くギリシャ哲

学までさかのぼる。崇高な古典的諸規定は、第1にコペルニクスの宇宙論の導入によってくずれ、第2のダーウィンの進化論説はもはや形而上的な原理によって人間を規定することを不可能とした。マルクス主義者は、人間を道具を作る動物とみ、社会関係の総体のうちに規定しようとした。さらにサイバネティックスやコンピューター理論の強力な展開は、第3の人間観の変革をおこしつつある。肯定的に扱うにせよ、否定的に扱うにせよ、人間と機械とのアナロジーをみごとに提供したのがサイバネティックスの思想である。

そして、このサイバティックスやシステム論・情報理論に立脚する人間観を、それはとりもなおさず、これらの諸理論が生物学をはじめ、政治、経済、教育そして哲学まで議論がおよんでいるという前提を認識して、かつ教育界で教育工学に代表されるような具体的な動向を照準に入れて、体育科教育に導入をはかったのが萩原・調枝らである。<sup>28)</sup>もとより、その出発点において、その人間観を明確に規定したというのではなく、またただちに体育教育の目標論として、あるいは本質論として規定したのではない。人間の運動にかかわる諸問題、そして教授・学習にかかわる諸問題と概念システムとをつき合わせる仕事と、同時にシステムズ、アプローチによる具体的な教授・学習の展開を試み、いわば分析と総合を同時に交流させる手続きをとっている。

従って、これらの手続きの中で、あえて人間観に結びつきうる考え方を著者なりに同定すれば、人間そのものをトータルな情報処理システム、すなわち、人間は物を見、手にふれ、情報をうけとり、言語を発声し、感覚し、「思考」「判断」「予測」「制御」しながら動作・行動する全体性とみなしている点であろうか。「一般システム論では、目標・秩序・オーガニゼーション、前進的個体差、総体としてのシステムに力点をおいている」<sup>29)</sup>という論述が、これを裏づけているとも考える。

佐藤も「人間の本質論からの究明という立場から重要になるのは、人間の知覚運動行動論と一般システム論であり…(中略)…われわれが教科教育学の立場からひとまず人間の知覚・運動行動論を展開する理由は“既存の教科”という現実的な教科ないし教科内容を対象としながらも、一方では教科全体にかかわり、教科の枠組をとりはずして、人間の本質的な側面からは“運動・健康を対象とする教育内容”は現状のままでよいかという学力論をも含めた問いかけの意味を内包している。」<sup>30)</sup>従って、人間の本質的把握としての『知覚・運動行動論』は、その『自己組織化』という概念の中で、体育科教育の目的構成論<sup>31)</sup>へと動きつつあるとみなせる。そして再度ふれるように「動作は、単に競技スポーツにおける運動スキルのみならず、人間の生き方(行動の仕方)にかかわる」また「人間の身体と動作のかかわり、ないしは『運動』『言語』『リズム』を含む動作理解は、もはや通教科領域(教科の枠を解いた領域)における共通の理念に立脚してのみ追求が可能である」<sup>32)</sup>という構想は、既に体育科教育=体育・スポーツ(体力・運動技術)という図式を超越して、というより体育科教育それ自体を超越しようという発展の方向性を予感させるものである。

しかし、理論的にどのように発展性を示唆するにせよ、教授学習(授業)そのものを豊かにイメージさせるものでなければならず、そしてそれは主として“自己組織化”にかかわっている。「自分たちの身体形成・支配・調整・運動文化活動過程における社会的関係の組織化・練習やトレーニングの計画・実施等を自主的に管理し、自らの行為の動機・目的・手段・執行・結果の自己評価や意

識的調整を行う能力の獲得として、全面発達する人間の姿」を描いた上での「自己形成の転化」<sup>33)</sup>がより具体的に、かつ鮮明に構想されることの方がより現実的で発展につながる課題といえるのではないか。

#### 4. まとめにかえて

「自己組織化」への構想をどう描くか。著者自身は教授行動研究に求めようとしている。ここにしか、自己の研究は位置づかない。それでいてトータルな授業システム全体を構想しきれない限界も意識している。教師システム自体、授業のサブ・システムであるが、佐藤がいうように知覚運動行動論が、人間の生き方(行動の仕方)にかかわる概念として定位できるなら、教師という人間が、授業過程においてどう行動するかにも、かかわり得るものと考えている。それは教師自身の「自己組織化」の問題である。

しかし、著者自身の仕事の方向性をそのように位置づけても危惧が残る。それは理念モデルにかかわって自身の不勉強に起因するところ大であるが、モデル自体が図式モデル言語モデルによって体系づけられてきた経過にある。モデルは、概念との対応において極めて柔軟性に富み、いくらかでも複雑な記述を可能にしている。その反面、みごとなくらい一義的なコミュニケーションを困難にしている。著者が、これまでの論述において、人様の記述を並びかえる程度のことしか出来ず、おのれの思想など、どこにも語っていないのは、自身の雑居的思想性のゆえであるが、同時に複雑な記述を正確に把握していない事実を認めているからでもある。そして、雑居的思想性とは、かなり無思想に近いものであることも認めているからかもしれない。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 小林篤『体育の授業分析』大修館 1983
- 2) 『現代教育科学』特集「授業研究の方法論をどう確立するか」 No.168, 1971
- 3) 『現代教育科学』特集「授業研究の視点をどう捉え直すか」 No.190, 1973
- 4) 城丸章夫他共編『戦後民主体育の展開(理論編)』 pp. 133—167 新評論 1975 の佐々木・瀬畑論争に典型的にみることができる。
- 5) 『哲学辞典』 pp. 588—589 平凡社 1975
- 6) 宇土正彦編著『体育科教育法入門』 pp. 3—4 大修館 1983
- 7) 正木健雄「いま、子どものからだにみられること」 pp. 13—16 『体育科教育』 1983. 6月増刊
- 8) 浅見俊雄「子どもの体力の育成をどう考えるのか」『体育科教育』 pp. 24—26 31巻4号 1983
- 9) 城丸章夫『体育教育の本質』 pp. 186—196 明治図書 1960
- 10) 正木健雄「保健・体育科では何を考えるのか」『教育』 1962年12月増刊号
- 11) 梅根悟, 海後勝雄, 瀬畑二郎, 丹下保夫「教科としての『体育』の本質は何か」1960 城丸他共編『戦後民主体育の展開』新評論 pp. 95—106
- 12) 荒木豊「体育科教育と体力育成(その一)——体力養成の位置づけと科学性——」『体育グループ』20号 1964
- 13) 丹下保夫, 中村敏雄他「水泳の技術指導における問題点」『体育学研究』7—1 p. 251 1962
- 14) 入江克己「荒木氏の——運動文化論における体力養成の位置づけ——によせて」『体育グループ』20号 1964
- 15) 正木健雄「生活からみた体力——全面発達についての問題提起——」1962 『保健体育の自主編成』(身体と教育2) pp. 293—299 1973

- 16) 坂入博子「授業だけではどうにもならない体力」 1963 『保健体育の自主編成』（身体と教育） pp. 300—301 1973
- 17) 16)に同じ
- 18) 円田善英「80年代の子ども体育授業の課題」 『体育科教育』28巻7号 pp. 17—20 1980
- 19) 中村敏雄「円田氏に問う——『動作と調合』と教材について——」 『体育科教育』28号11号 1980
- 20) 円田善英「運動文化における身体形成の課題——中村氏のコメントについて——」 『体育科教育』28巻13号 pp. 52—57 1980
- 21) 浅見俊雄「子どもの体力の育成をどう考えるか」 『体育科教育』31巻4号 pp. 24—26 1983
- 22) 高橋健夫「西ドイツの体育・スポーツ—スポーツ科教育の基本理念—」 『体育科教育』 pp. 82—85 1978. 10月増刊号
- 23) 川本信正「アマチュアリズムの終焉」 『体育科教育』31巻1号 pp. 17—20 1983
- 24) 伊藤高弘「商業主義のスポーツ侵略」 『体育科教育』31巻1号 pp. 24—26 1983
- 25) 高橋健夫「学習指導要領にみる問題点と今後の課題」 『体育科教育』31巻4号 pp. 42—44 1983
- 26) 近藤英男「『スポーツを考える』とはどういうことか——『あらためてスポーツとは』から」 『体育科教育』30巻11号 pp. 17—20 1982
- 27) 竹之下休蔵「『体育科教育』に求められる新たな課題—21世紀の社会にむけて—」 『体育科教育』31巻4号 pp. 10—13 1983
- 28) 萩原仁・調枝孝治編『人間の知覚・運動行動』1975 『知覚・運動行動のシステム分析』1976 『知覚・運動行動の組織化』1978 いずれも不味堂
- 29) 萩原仁『知覚・運動行動の組織化』 p. 10 不味堂 1978
- 30) 佐藤裕他「教科教育学としての体育科教育の位置と役割」 中四国教育学研究紀要 28巻 pp. 377—380 1982
- 31) 長谷川裕「体力・運動文化・知覚・運動行動(1)——体育科教育への目的論構成にむけて（覚え書）——」 中四国教育学研究紀要 28巻 pp. 381—384 1982
- 32) 佐藤裕「『自分の体と動作への理解』を深める、セルフケアの能力をどう育てるか」 『新体育』Vol. 50, No. 10,11 pp. 40—45 1980
- 33) 31) p. 384